

## 放射線サーベイヤー派遣隊に参加して

越谷市立病院 矢部 智

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源に国内観測史上最大のM9.0の地震（東日本大震災）が発生した。津波、火災などにより広範囲で甚大な被害が発生し多くの犠牲者を出した。渦中の福島県でもこの地震により、11日に第1原発すべての原子炉が停止し19時3分に枝野官房長官より原子力緊急事態宣言が発令された。さらに、20時50分に福島県対策本部から1号機の半径2kmの住民1,864人に避難指示が発令、21時23分には、管総理大臣から1号機の半径3km以内の住民に避難命令、半径3kmから10km圏内の住民に対し屋内待機の指示が出された。刻々と変わってゆく報道に目は釘づけとなり、様々な被災者の映像が飛び込んできた。

12日には、1号機で水素爆発が起り、13日には3号機の燃料棒が露出し14日にはまた水素爆発が起きた。15日には、2号機で爆発音が確認され4号機では爆発が起り、火災が発生した。福島第2原発でも1～4号機の全ての原子炉が停止した。福島県災害対策本部は同日、福島第一原子力発電所から半径20km・第二原子力発電所から半径10kmの範囲にあたる市町村に対し避難勧告と福島第一原子力発電所半径20～30kmにあたる市町村には、屋内待避を発令した。メディアは各局すべてが特別番組に切り替え、生々しい震災や津波の傷跡を中継し、また専門家をコメンテーターとして招き入れ、原発や放射能の人体被害についての報道がされていた。あまりの被害の大きさに自然の驚異になす術もない人間の無力さを感じながらも、難を逃れた方たちの必死な対応に力強さも感じられた。そんな報道の中で、ストレッチャーに乗った高齢者や車いすに乗って運ばれる負傷者が自衛隊のヘリコプターで救助され、放射能汚染のスク

リーニング検査を受けている映像が流れていた。また、ある番組では白装束にゴーグル、マスクと映画さながらの出で立ちでスクリーニングサーベイに長い列を作り検査を待っている避難者の映像が流れていた。避難者は日に日に増える中、放射能の汚染も広がりを見せ、政府・行政の対応として内閣府原子力安全委員会と福島県知事から（社）日本放射線技師会へスクリーニングサーベイヤーの派遣を要請してきた。埼玉県放射線技師会はずばやく小川会長、堀江副会長が日本放射線技師会と調整し、埼玉県会員からの応援態勢を組織した。メールでその一報を受けた私は、直ぐに妻に相談はしたものの、詳細も分からないまま福島への派遣に志願した。

3月16日、交通網は混乱のさなか、90分程で自宅の草加から浜松町の日本放射線技師会の事務所へ到着することが出来た。しかし、電車内は超満員で電車に乗れない人で、ホームはもとより駅構内全体が人で溢れていた。

事務所に着くと、サーベイヤーに志願した北海道、秋田県、関東勢に加え香川県からの全12名が集合していた。第1陣ということもあり不安の中での出陣ではあったが、中澤技師会長はじめスタッフの方たちのご尽力を頂き、団結式を終え浜松町を出発した。6日間の行程は専用バスで緊急車両の指定を受け、高速道路に乗ることが出来た。首都高速道路・東北自動車道は、一般車両の乗り入れはまだ規制されており、高速道路上ではほとんど車両を見かけることもなく、遭遇するのは自衛隊車両か他県から応援に向かう救急車と消防車であった。小雪が舞う中、福島県庁に到着し『福島県緊急被ばく医療活動』マニュアルの説明を受けたが、既に事態は想定を超えた局面を迎え



ておりスクリーニングレベルも放射線測定器（GMサーベイメーター）で1万3千カウント（cpm）以上を全身除染の対象とみなしていたものが、私が福島入りした時には10万カウント（cpm）以上を全身除染の対象と変更されていた。これからサーベイヤーを行ってゆく私たちにとって、全身除染のスクリーニングレベルが8倍に引き上げられていたことに正直、動揺が走った。県庁のある福島市も震災の被害が大きく、水道は断水され、仮設のトイレであった。私たちが通された会議室のパーテーションも倒れていた。私たちは、本部の指示で郡山市と田村市を担当することとなった。

避難所で寝袋の生活を想定していたが、当日から営業を始めた郡山市の旅館に宿を確保することが出来た。旅館も震災の被害で玄関が傾き、風呂場の脱衣所の扉が閉まらず、のれんで隠している状態だった。

初日のサーベイに入れたのは19時になってしまったが、会場となっている郡山市総合体育館は24時間体制でスクリーニング検査を行っていたので早速サーベイに参加した。既に、福島県放射線技師会から派遣されている方や消防隊員の方がサーベイを行っているところに合流し、4時間のサーベイを行い140名の計測を行った。1日の行動を終えて検査に訪れるせいか、以前なら全身除染対象の1万3千カウント（cpm）以上の高い数値の方が4名いた。この会場には、消防隊が組織する緊急除染用のシャワーテントを屋外に設備されており、数値の高かった頭部や手洗いを指示した。私が測定した方の中には、震災で壊れた瓦屋根の修繕をしてきた方が2万カウントを超えていた。また、第一原発のある双葉町からバイクで避難してきた方も2万カウントを超え上着の除染を行った。郡山の夜は寒く会場前には残雪もあり、体力的にも厳しいものだった。

2日目は、郡山市総合体育館と田村市の避難所

の2班に分かれ、私は昨日と同様、郡山市総合体育館で朝8時30分から夜7時までの間360名のスクリーニングサーベイを行った。本来、この体育館も避難所の指定になっているのだが、地震により体育館のガラスがわれ、照明が落ち避難所としての機能を失っていた。ロビーで場所を確保しスクリーニング検査を行った。国立病院機構のサーベイヤーも応援に来ていた。

若者はズボンの裾を地面に引きずっている『腰パン』ファッションが多く測定でも高値を示し、裾を引きずらないよう指示をした。見た目やんちゃそうな若者もこの時ばかりは素直に言うことを聞き、腰上でベルトを締め直し、ズボンの裾をまくり上げていた。福島の若者から『腰パン』が消える日も近いかも・・・！

スクリーニング検査を受けた証明書がないと、病院や避難所に入れないように行政が指導しているため、搬送途中の救急車からも要請があると車内でスクリーニング検査を行うこともたびたびあった。

避難所となっている郡山市であっても、放射能の影響は無視できるものではなく空中線量率は、 $20\mu\text{SV/h}$ と実にさいたま市の300倍であった。スクリーニング検査に訪れた妊婦の方へは、屋内であれば数十分の一以下に空中線量率は下がるので必要時以外の外出は避けるよう伝えたものの、現状のレベルでは胎児に影響はないことも加え、いろいろな情報に惑わされぬよう説明した。

屋外では、路面の計測値が高く路上の残雪を測定すると実に5万カウント（cpm）の数値が計測された。外出後の子供の手洗いやペットの扱いにも相談が相次ぎ対応に応じることが多かった。要望に応じてペットのスクリーニングサーベイも行った。

3日目は、避難所を担当した。初めは田村市陸上競技場であったが、1時間ほどで福島県立病院よりサーベイヤーの応援部隊が合流したため、次



の大越市体育館へ向かった。やや小さめの体育館であったが149名の避難者を受け入れており全員のスクリーニングを行った。次いで大越行政局に避難されている方138名の測定を行った。ここは、高齢者や幼児の家族を主体に受け入れている避難所で、寝たきりの方も数人居り、そこへ出向きスクリーニングサーベイを行った。サーベイの結果心配ないことを伝えるとご本人や家族からも安堵と笑顔が見られた。放射能の汚染そのものの被害もさることながら、各個人の汚染の心配がないことを証明することで避難所の秩序が保たれるとともに、このスクリーニングサーベイの意義が『安心を伝えること』であるものと痛感した。

次に、デンソー東日本工場へ向かった。ここは、建設中の工場で建屋のみが出来ていて中は空の状態であったためデンソーが避難所として提供した場所であった。さすが大手の工場だけあり大きな屋内には1500名余りの方が避難をしていた。床は、コンクリートで今までの避難所では無かった光景を目にした。昨日までは、食事もままならない状況だったそうだが本日より自衛隊の炊き出し班が到着し、風呂釜のような大きな鍋4基でやっと温かい食事ができたようだ。毎日のように避難者の入れ替えがあり本日は100名のスクリーニングサーベイを行った。

最後は、旧石森小学校へ向かった。ここは、昨年廃校になった学校であったが5年前に建てかえたばかりのとてもきれいな建物であった。258名のスクリーニングサーベイを行い、終了した。計839名の計測で本日は汚染にあたる高値を示す方は居られなかった。

4日目は、常葉体育館へ向かった。山道の途中にガソリンスタンドで給油待ちの渋滞に巻き込まれた。スタンドはまだ営業していないにもかかわらず数百台の長い列ができていた。聞くところによると、前の晩から待っているという。山道の狭い道に給油待ちの車で一車線つぶされ、大型車の

往来で流れは滞り警察が出動してきたが、身動きの取れない状況に警察も困惑しているようだった。

常葉体育館、常葉行政局と2か所を回り307名のスクリーニングサーベイを行った。

お昼ごはんとして、おにぎり2個とイワシの缶詰を食べていた私たちに、避難所の方が炊き出しで作った、けんちん汁を差し入れしてくれた。我々にとっても忘れられない味となった。本当に温かく美味しかった。その後、郡山市総合体育館へ合流し4日目が終了した。

5日目の最終日は、郡山市ビックパレットという大きな施設に向かった。こちらでいうところの『さいたまスーパーアリーナ』のような建物で国際会議も可能な大きな施設が避難所となっていた。数千人規模で避難者を受け入れていた。スクリーニングを行う場所として提供されたのが、展示ホールのような広い場所であったが、天井は剥がれ、照明も落ちていて、空調設備のダクトまで落ちていた。広い空間であったが安全が確保された隅っこの狭いスペースでサーベイを行った。そんなさなかに福島に来て最も大きな余震が起こり、避難所内でありながらも避難指示の放送が流れた。幸いにも、何事も起こらずに済んだがまだ余談の許さない状況に変わりはなかった。しばらくして、福島県立医大のサーベイヤークラスと合流し220名のサーベイを行った。

福島原発で働いていて避難してきた方も多く居合わせ、震災前の原発内では考えられない測定値に驚き、普段から使用していたというGMサーベイメーターで自分が測定されている数値を覗き込んでいたのは印象的であった。私が学生の頃、『地震が起こったら原発へ逃げろ!』と教わった。それほど、原発は頑丈かつ強固に作られ徹底した管理下の元で運転されているという裏付けでもあった。しかし、今回の震災は想定をはるかに超えた規模で、自然の驚異になす術がなかったとい

巻頭言  
 会 告  
 お知らせ  
 学術特集  
 総会資料  
 報 告  
 本会の動き  
 掲各  
 示地  
 板区  
 議 事 録  
 動 員 向 の  
 役員名簿  
 投稿規定  
 ジ年  
 コ間  
 ース  
 ルケ  
 申F  
 込A  
 書X



うことになる。原発で働いていた方たちこそ、変わり果てた原子炉の建屋が今でも信じられないことであろう。

5日間のスクリーニングサーベイは、のべ4887名。うち全身除染対象者は0名、部分除染対象者は35名、幸いにも健康に影響の出るレベルの方は一人も出なかった。

6日目の21日の朝には、郡山を後に一路東京へと向かった。この5日間のいろいろなことが走馬灯のように巡り、家族に会えるうれしさに反し今回参加した12名のメンバーとの別れに、少し複雑な心境になった。機会があればまたこのメンバーで何か仕事をしてみたいと心より思えた最高のメンバーであった。東京には昼すぎに到着し、日本放射線技師会の事務所で中澤会長をはじめ小川・井戸副会長に出迎えを頂き、解散式を行っていただいた。今回の経験を次の派遣隊への参考として申し送りをし、サーベイから得たデータは今後の学術的資料にまとめ上げることを使命とし今回の放射線サーベイヤークラス派遣隊第1次隊は、解散となった。派遣前から手厚い準備を頂き、派遣中も常に後方支援して下さった日本放射線技師会の北村理事をはじめ関係スタッフ各位、また、埼玉県放射線技師会で調整を図っていただいた小川会長・堀江副会長に深く感謝いたします。

最後に、今回サーベイヤークラスとして参加させていただくために多大なるご協力を頂いた、院内関係者各位にこの場をお借りして御礼を申し上げるとともに、計画停電で大変な時期に派遣に協力して送り出してくれた放射線科一同各位にも心からの感謝とともに御礼を申し上げます。

